

第26回母子保健奨励賞 受賞者の業績

角田 つね (46歳) 助産師・青森県



昭和56年、公立金木病院に勤務し現在に至る。当時の県内の状況に鑑み、女性への思春期健康教育の重要性を痛感。昭和59年より産婦人科病棟にて女子中学生を対象に「母性の体験学習」を開始した。平成6年からは対象を男女に拡大し、「父性の体験学習」を実施、現在保健センターにおいて継続中の「赤ちゃんふれあい教室」の基盤を作った。妊産婦の禁煙支援に積極的に取り組み、マニュアル作成などに力を尽くした。

畠山 良彦 (52歳) 歯科医師・岩手県



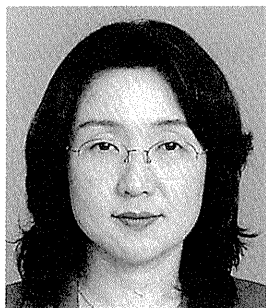
昭和57年、畠山歯科医院を開業。昭和58年、厚生省歯科保健モデル事業への参加をきっかけに、乳幼児の歯科健診および指導、早期治療の基盤強化に力を尽くし、う歯罹患率を減少させた。妊娠期からの口腔ケアの重要性にも着目し、歯科保健の重要性について母親学級で講話を行う一方で、妊婦歯科健診を実施した。さらに2歳6か月健診を立ち上げてフッ化物塗布の普及に努めるなど、母子の歯科保健に多大な功績があった。

奥山 裕子 (54歳) 保健師・山形県



昭和48年、最上町に奉職。全出生児の早期家庭訪問を実施し、母子の健康管理、育児不安解消に努めた。「地域の中での仲間づくり」をキーワードに母親学級や乳幼児健診を運営し、安心して子育てできる環境づくりに努めた。平成6年には子育てに悩む母親の支援のため、健康センターを開放して「育児のつどい」を開始し、保健師が育児相談を受けるとともに母親同士の情報交換の場とするなど、育児支援事業に大きく貢献した。

椿本 美栄子 (47歳) 保健師・埼玉県

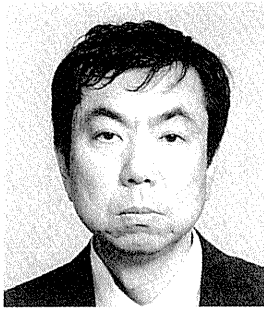


昭和54年保健師として活動を始め、平成2年蓮田市に奉職。孤立する母親の存在に気づき、母親学級を両親学級と改めて父親の参加を図り、母親同士の交流を図った。妊産婦の家庭訪問を実施し、ハイリスク妊婦の把握とマタニティブルーへの対応に努めた。乳幼児健診後のフォローアップに努め、育児支援、療育指導の場を整備した。また、母子愛育会の育成と強化に尽力し、妊娠・出産・育児の一貫した体制の基盤整備に貢献した。

青柳 恵子 (52歳) 保健師・千葉県



昭和59年、東庄町に奉職。保健師活動の充実のため、保健師の増員に向けて県担当課や保健所等の関係機関に働きかけて成果を得、母子保健事業の充実に大きく寄与した。低体重児出産・周産期死亡・乳幼児死亡率が高かったため、地区助産師との連携強化、ハイリスク妊婦への家庭訪問の強化など対策を図り、周産期医療の整備に力を尽くした。さらに、乳幼児から高齢者までを視野に入れたきめ細かい健康支援にも取り組んだ。



永井 完待 (51歳) 医師・神奈川県

昭和62年、地域医療、小児保健発展を目指して永井こども病院を開業。平成9年より医師会の常任理事として小児の急病医療事業の現状評価、将来構想の策定に着手。救急医療機関および救急医療情報センターの体系的な再整備と構築に多大な貢献をした。結果、1次・2次・3次医療機関の役割分担が明確化して休日・夜間の小児救急体制が確立し、平成13年には実施に至り、着実な成果を上げている。



有馬 恵子 (51歳) 保健師・福井県

昭和52年鯖江市に奉職。乳幼児の神経学的発達に着目し、先進県にてボイタ法を習得。乳幼児健診等の発達観察に生かし、早期に適切な保健指導を実施した。また、地域の区長会、婦人会、民生委員等の団体に働きかけて「立待地区愛育会」を発足させるなど地域の愛育会結成と育成に力を尽くした。各種母子保健教室の開設、子育て自主グループの支援、子育てネットワーク委員会の開催など、地域母子保健活動に大きく寄与した。



平林 道子 (54歳) 医師・長野県

昭和57年より松本協立病院に勤務。一般診療と発達外来を担当する一方、昭和58年より現在まで、小児神経発達専門医として松本市の2次乳幼児健診に携わる。昭和60年には母子療育的育児支援教室「あそびの教室」を開設し、参加児の診断・療育指導および家庭指導を行う。障害を持つ子や発達の遅れのある子どもの保育園入園運動を進める一方で保育園巡回指導を行うなど、地域の障害児教育および支援に多大な功績があった。



峪 道代 (54歳) 言語聴覚士・大阪府

大阪市立小児保健センターを経て、昭和62年より大阪府立保健総合医療センターに勤務。口唇口蓋裂の総合一貫治療チームの一員として言語治療に取り組んだ。口蓋形成手術前の乳児期からの言語管理に取り組み、正常言語機能の獲得に大きな成果を上げた。母親への支援と指導の大切さに着目して母親教室を開設するなど多方面から言語治療の向上に努め、わが国の言語治療の医療体制整備に先駆的な役割を果たした。



有馬 富子 (52歳) 保健師・兵庫県

昭和50年、加古川市に奉職。核家族化し孤立した育児環境に着目し、乳児健診において小児科医らと連携して育児支援を行った。平成7年、「母親学級」を「両親学級」と改めて内容を一新し、参加率を向上させた。地域住民と共に行う子育て支援を目指し、児童委員・民生委員・ボランティアらと協力して「地域子育てひろば」を立ち上げ、また、母親同士が交流する場を設けて育児不安の解消に努めるなど育児支援に大きく寄与した。



熊丸 みつ子 (53年) 保育士・福岡県

幼稚園教諭を経て、昭和60年、熊丸音楽教室を開設する一方、幼児教育専門官として講師活動に入る。平成7年、福岡県母子保健大会において子育て支援を目的に「親子遊び」を指導。以後、県下に広まることとなった。県下の市町村が主催する子育て支援活動に講師として参加し、母親らに新聞紙やペットボトルなど身近なもので遊ぶ方法を伝えている。また、保育士、教職員などの啓発活動にも積極的に取り組んでいる。



高山 文子 (51歳) 保健師・熊本県

昭和51年、保健師未設置であった水上町に奉職。母子保健事業の基礎を確立するため、そのシステム構築に努めた。平成9年、新生児期の育児不安の増加に着目。栄養士の同行訪問を開始し、母子の健康相談日を開設するなど、積極的に育児支援を行った。また、仕事を持つ親と子のふれあいを目的とした「カントリーチャイルド子育て支援計画」など、地域の保健計画の策定にも力を尽くし、母子保健事業の向上に多大な功績があった。



木部 眞里子 (54歳) 保健師・大分県

昭和49年、直入町に奉職。保健師未設置の町で、母子健康管理の整備、充実に取り組み、妊婦健診、乳幼児健診を実施。家庭保育の充実に向けて乳児学級、新婚学級を開催し、低体重児の減少、う歯率低下など成果を上げた。母子推進員の増員を図り、共に育児サークル「すこやかクラブ」を立ち上げた。また、愛育班の結成および活動の充実、保健センターの建設に尽力し、母子保健をはじめとした町民の健康状態向上に寄与した。



武島 和美 (54歳) 保健師・沖縄県

昭和47年、保健所の駐在保健師として宮古島下地町に赴任。個別支援の大切さを確信し、重点的に家庭訪問活動を実施。妊産婦ばかりでなく家族全体を視野に入れた支援を行い、住民の妊娠・出産に対する意識の啓発に貢献した。昭和58年より平良市の保健師として子育て支援に取り組み、「赤ちゃん広場」や「子育て広場」を実施。また、虐待防止ネットワーク会議の設置にも大きな役割を果たした。



松本 八千穂 (54歳) 助産師・福岡市

昭和47年、福岡市に奉職。出産介助を行う中で「桶谷式母乳マッサージ」に出会い、母乳育児の支援に役立てた。昭和57年保健所に着任。臨床経験を生かし、一貫した母子支援事業を展開。「働くママとパパのためのマタニティスクール」「乳幼児発達支援事業」等を実施した。また、複雑な家庭環境における母親の育児不安、産後うつ病の早期発見、児童虐待予備軍の早期対応、DV被害者の母親への支援などに積極的に取り組んだ。